

## 推薦書

大塚頌子先生は岡山大学名誉教授であり、これまでてんかんの研究と診療において大きな業績を残されました。1971年に岡山大学医学部を卒業され、ただちに同・小児科学教室に入局されました。そこで 敬大田原俊輔先生のご指導のもと小児神経学のグループに所属され研鑽を積まれました。とくに小児てんかん学において目覚ましい活躍をされ、大田原先生と 敬岡 鏡次先生の研究と診療を支えられました。大田原先生が昭和1979年3月開設の岡山大学医学部脳代謝研究施設発達神経科学部門 初代教授に就任されるのに伴いこれに参加されました。そして1987年に病院の診療科として小児神経科が設置されると、1989年には同科講師に就任されました。1995年には岡山大学医学部において第二代岡教授のもとで小児神経学講座助教授に昇任され、1996年にはカナダ McGill 大学 Montreal 神経学研究所に留学して Frederick Andermann 教授に師事されました。2001年には講座が岡山大学大学院医歯学総合研究科発達神経病態学に改組され、2004年にはその第三代教授に就任されました。そして研究の発展と多くの患者の方々の診療に弛みない尽力を続けられた後、2012年に岡山大学を定年退任されました。現在は旭川荘療育・医療センター顧問を務めておられます。

先生のこの間の研究成果は世界をリードするもので枚挙にいとまがありませんが、特に重要なものは難治てんかんの病態と治療に関わるものでありました。Dravet 症候群、乳児期早期のてんかん性脳症なかでも大田原症候群と早期ミオクロニー脳症、そして West 症候群、Lennox-Gastaut 症候群、睡眠時持続性棘徐波 (CSWS)を示すてんかん性脳症、非けいれん性てんかん重積状態、活性型ビタミン B6 大量療法の開発などに関する先駆的な優れた業績を残されています。医学博士号は「小児てんかんにおける断薬過程に関する研究」により授与されています。常に先端的研究を希求し、教室におけるてんかんの分子遺伝学、高周波脳活動などの脳波分析、てんかんに伴う小児の高次脳機能障害などの研究も主導されました。そして Montreal 神経学研究所での研究経験をもとに、岡山大学病院内において脳神経外科等と協力して、てんかん外科治療の推進の端緒を作られました。そのご活躍により岡山大学病院に診療科として小児神経科を併せ持つ当教室は国際的にも有数のてんかんの研究と診療の施設としての地歩を固めています。大田原教授の有名な業績の中の多くは大塚先生の貢献なくしては有り得なかったであろうと推察されます。大塚先生は大田原教授の下で約10年間の長きにわたり病棟医長を勤められましたが、その活躍を支えるためのご苦勞は並大抵ではなかったはずで

私達至らぬ後輩の書いた脳波所見を直して回診に間に合わせるために、夜遅くまで詳細な添削をして下さっていたことが、有難くそして申し訳ない気持ちと共に思い出されます。

日本小児神経学会理事として薬事委員会委員長など各種委員長の歴任や、厚生労働省の「医療上の必要性の高い未承認薬・適応外薬問題検討委員会」の構成員としての尽力を通して、多くの抗てんかん薬をはじめとする難治小児神経疾患治療薬の日本への導入・承認を推進されました。さらに日本てんかん学会理事として、日本におけるてんかんの実態調査やてんかん学の研修、てんかん専門医制度の確立にも貢献され、2010年には第44回日本てんかん学会を岡山市で主催されました。受賞歴としては1991年には第1回てんかん治療研究振興財団研究褒賞を受けておられます。

大塚先生はこのような輝かしい経歴の一方で、常に患者に寄り添う医療の姿勢を貫かれました。2011年には患者団体である日本てんかん協会の全国大会を実行委員長として、多くの患者・家族と協力しながら成功裏に開催されました。岡山大学教育学部特殊教育部門とも共同して、障害児教育の啓発にも努めておられます。退任のときは最後の診察で名残を惜しむ患者・家族の方々が引きも切らず訪問したことは大変印象深く、病で悩み苦しむ方々からこれほどまでに慕われる教授は少ないのではないかと思われました。先生はその後ろ姿により後進の医師に対して臨床医のあるべき姿を示して下さいました。

大塚頌子先生はこのように日本のみならず世界のてんかんの研究と診療に大きく貢献してこられましたので、てんかん治療研究振興財団研究功労賞にふさわしいと考え、推薦申し上げます。

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科発達神経病態学 教授

小林勝弘